

## 教育研究グループ「研究結果」特別支援学校コーディネーター研究会 報告書

2016年度は3回の研究会を行い、1回の学会大会自主シンポジウムを行い、特別支援学校のセンター的機能や特別支援教育コーディネーター論について討議を行った。特に特別支援教育コーディネーターの経験が少ない参加者にとっては、自身の研修的意味合いも大きかった。今年度は、ワークショップ形式を取り入れたり、ワークショップとの親和性が高い「ファシリテーション&ホワイトボード・ミーティング®セミナー」を外部講師を招聘して開催した。

### 1. 第1回 特別支援学校コーディネーター研究会

#### 【内容】

「コーディネーターは、こうでない！」

第1部 特別支援学校のコーディネーターの役割 ホントのところ！

以下のキーワード（校内支援、WBM、伝道師、通訳、次世代育成、最近の研修ネタ、コンサルテーション、教員という

同じ立場、専門家はだれ？、ちがいに気づく、職員室のコーヒー、25のチェックシート）をもとに、話題提供をした。

第2部 参加者による意見交換・実践交流

#### 【参加者の感想】

- ・ 様々な方々の実践例や困っていることなどを伺うことができ、大変勉強になりました。
- ・ 新しい学校のコーディネーターとして悩んでいたのも、このように他校の話聞く場があり、ありがたかったです。
- ・ コーディネーターとして工夫していること等、他の方の意見が聞けて面白かった。

### 2. 第2回 特別支援学校コーディネーター研究会

#### 【内容】

「特別支援教育コーディネーターのためのファシリテーション&ホワイトボード・ミーティング®セミナー」

- 1 講話「障がいをもつ仲間と歩んできた道」
- 2 ペア・コミュニケーションとファシリテーション
- 3 ミニホワイトボードでのコミュニケーション
- 4 ホワイトボード・ミーティング®とは
- 5 「定例進捗会議」でリフレクション共有
- 6 基本的な考え方～「心の体力」を温める日常のコミュニケーションs

講師：株式会社ひとまち 代表取締役 ちょんせいこ 氏

#### 【参加者の感想】

- ・ 4時間があっという間でした。会議に取り入れていきたいと思います。
- ・ 特別支援に特化した内容でうれしかった。ケース会議の手法をもっとみがきたいと思った。
- ・ 特別支援教育コーディネーターに限らず、校内のあらゆる場面で活かせる内容でした。すぐに明日から使ってみたいと感じられるものがたくさんありました。
- ・ 相談支援の基礎技能としても子どもの見方という点でもとても勉強になったと思います。

### 3. 第3回 特別支援学校コーディネーター研究会

#### 【内容】

ワークショップ「コーディネーターは、こうでない！ Part2」

「コーディネーターって何をする人？」「コーディネーターにおける『新しいことわざ』を作る」という問いをもとにワークショップを行った。

#### 【参加者の感想】

- ・ 「無理をしない」というルールにふところの深さを感じ、安心して参加できました。

- ・ 楽しみました。ゴールにもちゃんとたどりつきました。ワークショップを運営する雅子さんのスキル自体を、いつもぬすみたいと思っています。学びの主体性を引き出すことが、内容そのもの以上に大切と気づかされます。
- ・ 自分自身、有益だった。
- ・ とても楽しかったです。
- ・ 面白くあっという間でした。少人数だったので他の参加者の方たちともすぐにうちとけられてリラックスして楽しめました。

#### 4. 日本特殊教育学会第54回大会 自主シンポジウム

【内容】(詳細は、別紙2)

「特別支援学校の「センター的機能」の現状と課題(5) - 「センター的機能」の これからの10年を考える -

企画者： 田中雅子 (東京都立中野特別支援学校)

司会者： 奥住秀之 (東京学芸大学)

話題提供者： 赤塚正一 (長野県上田養護学校) 徳永亜希雄 (横浜国立大学)

指定討論者： 滝坂信一 (元帝京科学大学)

# 特別支援学校の「センター的機能」の現状と課題 (5)

－「センター的機能」の これからの 10 年を考える－

企画者	田中 雅子	(東京都立中野特別支援学校)
司会者	奥住 秀之	(東京学芸大学)
話題提供者	赤塚 正一	(長野県上田養護学校)
	徳永亜希雄	(横浜国立大学)
指定討論者	滝坂 信一	(元帝京科学大学)

KEY WORDS: 特別支援学校, センター的機能, 特別支援教育コーディネーター

## 【企画趣旨】

特別支援教育の開始に伴い特別支援学校のセンター的機能が法制上位置づけられ 9 年が経過した。センター的機能を担当する分掌・組織を設けている特別支援学校は 9 割を超え、特別支援学校のセンター的機能は定着したと言える。本シンポジウムでは 2012 度から 4 回連続で特別支援学校の特別支援教育コーディネーター（以下、コーディネーター）が実践しているセンター的機能の取組を紹介し、現状を総括してきた。

これまでの特別支援学校のセンター的機能を見ると、通常学級への支援が色濃かった印象がある。「在籍している児童生徒の教育が特別支援学校の本務であり、センター的機能は補助的な取組ではないか」という意見も本シンポジウムで出されることがあるが、そもそもセンター的機能のゴールは、特別支援学校在籍している児童生徒の地域での豊かな生活に関わってくるのではないだろうか。

5 回目となる今回の自主シンポジウムでは、約 10 年にわたって取り組んできた特別支援学校（知的障害校、肢体不自由校）の現状を話題提供するとともに、「そもそも誰のためのセンター的機能なのか?」「何のためにセンター的機能があるのか?」の議論を深め、これからの 10 年特別支援学校はセンター的機能をどのように展開していくべきか、について検討したい。

## 【話題提供者の要旨】

### 1. 地域とともにインクルーシブ教育システム構築を進めるためのセンター的機能のあり方—これまでの実践の成果と課題を踏まえての今後の展開— (赤塚正一)

インクルーシブ教育システム構築に向けての特別支援学校のセンター的機能の重要性は、中央教育審議会初等中等教育分科会(2012)の「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進(報告)」においても指摘されている。

特別支援学校のコーディネーターの立場として、小中学校等に対する相談支援のみならず、常に地域のニーズを掘り起こし、地域の関係者とともにその課題解決を図る取り組みを進めてきた。長野県稲荷山養護学校においては、自治体の教育委員会相談員との協働により、巡回相談を基盤とした就学期の移行支援システムの構築を図った(赤塚・大石, 2013)。また、長野県小諸養護学校においては、圏域の校長会との協働により、圏域全ての小中学校・高等学校が合理的配慮を提供するための基礎的環境整備に関する実践の PDCA サイクル化による継続の道筋をつけた。さらに、その両校において、コーディネーター養成(スキルアップ)研修を企画・運営してきている。

実践から引き出された、今後のセンター的機能に関する示唆は、次の 3 点であった。第 1 に、予防的視点を持って地域全体の(可能な限り乳幼児期から学校卒業後までの)

支援状況に目を向けること、第 2 に、地域のキーパーソンとの協働を地域関与時から進めること、第 3 に、校内体制をより一層整備・拡充して、専門性の向上に努めること、である。

以上の点を踏まえ、自身の考える「特別支援学校のセンター的機能の今後の展開」について展望したい。

### 2. 小・中学校に在籍する肢体不自由児の指導のための特別支援学校のセンター的機能の活用に関する研究—小・中学校側のニーズを踏まえて— (徳永亜希雄)

前職の国立特別支援教育総合研究所において取り組んだ「小・中学校に在籍する肢体不自由児の指導のための特別支援学校のセンター的機能の活用に関する研究—小・中学校側のニーズを踏まえて—」での知見等をもとに述べたい。小・中学校に在籍する肢体不自由児への指導のための特別支援学校のセンター的機能の活用に関心を持って、小・中学校側の活用及び特別支援学校側の支援の在り方について検討した結果、特別支援学校側としては、次のような事項が重要と考えられた。①センター的機能を推進する校内体制整備、②学校経営方針及び設置者の特別支援教育推進計画等での位置づけ、③支援地域内の小・中学校に在籍肢体不自由児の状況等の把握、④小・中学校の状況に合わせた具体的且つ実効性のある支援、⑤担当者の専門性、とりわけ教科指導に関する対応と専門性向上の取組、⑥関係機関や他職種等との連携や早期からの対応、⑦理解啓発と依頼手続の改善、⑧研修修会開催とネットワーク構築の必要性、⑨通級による指導の可能性。

権利条約を批准した我が国は、今後、国連の障害者委員会との間でやりとりを展開し、その中で、センター的機能以前に特別支援学校そのもの位置づけについての言及・検討があることが予想される。それらの議論とともにセンター的機能を検討していく必要がある。他の障害種や諸外国を見ても、学校教育の枠にとどまらず、小・中学校等で学ぶ障害のある子どもを外部から支援する機能は、今後も地域の中に必要だと考える。その中で、今後の「特別支援学校のセンター的機能」は、特に「⑥関係機関や他職種等との連携や早期からの対応」の視点で検討することが重要だと考える。

## 【指定討論者の要旨】

(滝坂信一)

「障害者の機会均等化に関する標準規則」(1993)をはじめ関連条約の履行促進のために成立した「障害者の権利条約」(2006)、「特別なニーズ教育に関する世界会議：アクセスと質」(1994)等の観点から、日本の「インクルーシブな教育システム」を検討し、「特別支援学校のセンター的機能」の果たす役割の現在と今後を論じる。

(TANAKA Masako, OKUZUMI Hideyuki, AKATSUKA Shoichi, TOKUNAGA Akio, TAKISAKA Shinichi)



